

# 世界と地域から存在を期待される 小規模だがきらりと光る大学へ～

麗澤会員の皆様におかれましては、日頃より麗澤大学の教育と研究に多大なるご支援とご協力を賜り心より感謝申し上げます。昨年4月に学長を拝命致しました徳永澄憲でございます。微力ではございますが、麗澤会の皆様のご指導の下に、本学の発展のために精一杯努力させていただき所存でございます。

我が国が昭和恐慌など一連の危機に見舞われた昭和10（1935）年に、創立者の廣池千九郎博士が、「知徳一体」の理念の下に、本学の前身である道徳科学専攻塾を縁に囲まれたこの地に開設されて、今年で85年になります。その間、昭和34（1959）年に外国語学部、平成4年に国際経済学部（現在の経済学部）を、さらに、一昨年学校教育研究科を開設し、知徳一体の教育を貫くと共に、外国語教育及び道徳一体の経済学教育に尽力して参りました。



学長  
徳永 澄憲

更なる発展を目指し今年4月に、外国語学部の中国語専攻は中国語・英語・ビジネスを学ぶ中国語・グローバルコミュニケーション専攻に進化し、経済学部は観光・地域創成専攻とAI・ビジネス専攻を開設致しました。さらに世界の人々が協働し共生する時代を見据え、「多様な価値との共生」をコンセプトとする国際学部（国際学科とグローバルビジネス学科）を新設致しました。語学力とビジネス力を武器に、世界で通用する専門性と世界の人々と共生できる力を兼ね備えた「グローバル人材」とグローバルな視点で地域に貢献する「グローバル人材」を輩出致します。北米・EU・アジアなどの海外協定校への交換留学制度や海外協定校とのダブルディグリー（異なる2つの学士号取得）プログラムを整備し、SDGs（持続可能な開発目標）教育の推進とPBL（課題発見解決型）学習の導入により、刻々と変化する世界と地域をデザインする「品格あるグローバルリーダー」を育成します。

しかし、これらのグローバル力は、大教室の座学だけでは身に付きません。キャンパスを飛び出し、世界や地域と直に触れ合い、お互いに切磋琢磨する中で身に付くものです。学生の顔と名前が一致する小規模の本学では、学生の「やる気に火をつける仕掛け」を豊富に用意し、学生の伸びる力を教職員や先輩・仲間がサポートしております。これらは、80余年前に創立者・廣池博士が残した先駆的な取り組みや組織風土を受け継いだものであり、麗澤の森に脈々と流れていることを実感しております。

最後に、「知徳一体」に基づく有為な人材育成のために、“小規模にこだわる”、“国際性にこだわる”麗澤大学として、世界と地域から期待される大学となるよう邁進いたしますことを宣言すると共に、今後とも大学への皆様の一層のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

# 青年期と大学生

学校教育法では、高校生は「生徒」、大学生は「学生」というように呼称が異なります。これは教科の内容にも関わりがあって、高等学校までは、正しい答えのある、いわゆる「学習」が中心でしたが、大学では主に、正しい答えのない、いわゆる「学問」に取り組むこととなります。このように、法律上も学習内容においても高校生と大学生は異なる存在として捉えられています。

しかし、高校生と大学のころの中を観察しますと、両者は必ずしも異なるものではないことに気づかされます。心理学に発達心理学という学問領域がございます。人間のころを研究分野とする心理学の領域で発達理論を展開したエリック・エリクソン（1902-1994）によりますと、13歳から19歳（人によっては20代後半）までが「青年期」という発達段階上の区分に位置付けられています。したがって、大学生は、概ねこの「青年期」という区分によって高校生と同じように一括りにされ、同じ発達課題をもつ存在であると考えられているのです。

そのような大学生にとって、この時期のもっとも主要な課題は、「アイデンティティの確立」です。つまり、自分とは何者か、どのような性格なのか、何がしたいのか、将来どうなりたいたいのか、そのために何を学びたいのか。このように青年期は、いわゆる「自分探しの時期」といえるでしょう。具体的に言えば、学業や自分の性格のこと、友人や恋人のこと、部活動や留学のこと、アルバイト先の仲間や上司、あるいは家族との人間関係のこと、自分の能力・適正や将来の職業のことなどをめぐって、ころと身体の変化に伴い、学生自らがここに描く理想の自分と現実に自覚している生身の自分との狭間で、ころが揺れ動き悩むのが、この時期なのです。人によっては、アイデンティティの危機を経験することすらあります。

麗澤大学では、多様な学生のキャンパスライフを支え、日常的な悩みや問題に対応したり、寄り添ったりすることができるよう、次のような部署を設けています。学生の健康を見守り健康増進を支援する「健康支援センター」、学生のころに寄り添う「学生相談室」、身体に障がいをもつ学生を支援する「CDS（障がい学生支援室）」、部活動や学生自治組織など学生の課外活動全般を支援する「学生課」、海外からの留学生や海外留学を希望する学生を支援する「グローバル教育推進室」、入学時から在学や卒業の就職活動を支援する「キャリアセンター」です。

本学では、このような入口から出口まで一貫して、きめ細やかな学生支援を提供するために教職員一同、日々新たに学生支援を行っております。



副学長（学生・国際担当）  
堀内 一史

## コロナ危機後の未来

### <Reitaku University Vision 2035>の実現を目指して

令和2（2020）年度、待望の国際学部が開設され第1期生159名を迎えました。総じて学生募集は堅調で、外国語学部・経済学部・国際学部の3学部あわせて677名、大学院は言語教育研究科・経済研究科・学校教育研究科の3研究科あわせて18名、総計695名の新入生を迎え賑やかな年度を迎えるはずでした。

ところが新型コロナウイルス感染症がパンデミックとなり、本学としても入学式やその関連行事を中止するという苦渋の決断をし、1学期の開始も5月7日と致しました。更に学生・教職員を感染から守るため全授業が当面オンラインです。

誰にとっても初めてのこの緊急事態に、4月からゴールデンウィークまでは基本的に在宅勤務で、オンライン授業の準備を一丸となって行いました。遠隔授業を提供するために必要なアプリ（ZoomやGoogle Classroomなど）を効果的に使いこなすことは必ずしも容易ではありません。

しかし学生たちに対面授業に劣らない教育を提供するべく努力を致しました。コロナ禍を私たちのICT技術を向上させる好機ととらえ、収束後には本学の教育水準がより高まったと評価していただけるよう、教職員一同精進して参る所存です。

経済の減速にともない、雇用も不安定になりつつあります。バイトができず生活が苦しくなる在学学生も出てくるでしょう。精神的に苦しくなることもあるでしょう。本学としても、あらゆるコミュニケーション手段を使って学生の心に寄り添っていきたくと考えています。

また令和2（2020）年度は18歳人口が大きく減少に転ずる節目の年でもあります。幾重にも苦しい状況ではありますが、コロナ危機後の未来、廣池学園が創立100周年を迎える2035年に照準を合わせ<Reitaku University Vision 2035>を策定し、<世界と地域から認知される大学>を目指し決意を新たにしています。建学の理念「知徳一体」を胸に刻み、<品性向上>と<国際教養>を両輪とする麗澤教育をより強く推進して参ります。

私事ではありますがこの3月末日を持ちまして8年間務めさせていただきました外国語学部長職を退任させていただきました。今後は昨年度より兼務しております副学長職（教育・研究担当）に専心し、本学の教育・研究活動全般を多角的に活性化したいと思っております。Center for English Communication（CEC）は全学組織とし、ネイティブの英語教育エキスパートによる英語授業を全学展開して参ります。また校舎あすなろ2F（通称iFloor）は昨夏大改修され、よりフレキシブルなセルフ・アクセスラーニングの場に生まれ変わりました（後援会からは多額の資金援助をいただき本当にありがとうございました）。

最後になりますが、後援会の皆様の日頃からの御理解と御協力に改めて深く感謝するとともに、今後忌憚のないご意見をいただけますようお願い申し上げます。



副学長（教育・研究担当）  
渡邊 信

# AI 時代を生き抜く 人材の育成を目指して

AI（人工知能）の活用が本格化し、あらゆる経済活動がデータに基づくことが求められる時代が来ました。2013年にオックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン氏らは、近い将来、これまで人間が携わってきた仕事の約半数がAIやロボットに代替されるという論文を発表し、世界に衝撃を与えました。経済学部はこれからAI時代を生き抜く人材を育成するための教育改革を進めて参ります。

経済学部では2020年度より新カリキュラムを始動させます。新カリキュラムではすべての学生が、これからのグローバル社会を生き抜くために必要な3つの「言語」を修得します。ひとつは「統計」。データを分析する力、分析結果を解釈する力を、少人数クラスで隔日に身につけます。2つ目は「簿記」。全員が日商簿記3級以上を取得し、財務諸表を読み解く力をつけます。3つ目は「英語」。定評ある本学の英語教育と新たに導入するe-learningにより、ビジネスに必要十分な英語力を修得します。

また、2020年度には、「AI・ビジネス専攻」と「観光・地域創生専攻」を新設します。

「AI・ビジネス専攻」ではAI技術をビジネスに応用できる人材の育成を目指します。プログラミング、データベースなど基本的なIT技術から今日のAI技術の中核である機械学習までを修得し、それらの技術をいかにビジネスに応用するかを学びます。同時に新設される「AI・ビジネス研究センター」と協働して実務家による実践的教育を行います。また、AIが一般化するに従いAIとモラルの問題が顕在化してきました。麗澤大学だからこそできるAIとモラルの教育・研究にも力を入れていきます。「観光・地域創生専攻」では経済学の視点から観光と地域創生を学びます。PBL（課題発見解決型）連携実習では柏市や地元企業と協力して、さまざまな地域課題を解決する実習を行います。

麗澤大学の経済学部が基盤としているのは創立者廣池千九郎が提唱した「道経一体」の経済学です。経済学部は、道経一体思想を身につけた、グローバルな視点を持ちローカルに活躍する「グローバルリーダー」を育成して参ります。今後とも大学および経済学部へご支援賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



経済学部長  
上村 昌司

# 外国語学部宣言

## あるいは今改めて問われる「外国語学部」の意義と外国語学習の本質

今年度、渡邊前学部長よりバトンを受け取りました千葉と申します。2020年度の麗澤大学の授業は、「遠隔教育」distance education というこれまでになかった形態をとって始まっています。今まで本学で当たり前であった授業形態は、「対面教育」という、耳慣れない言葉で対置されるわけですが、このような状況に至る以前、我々麗澤大学の教員がこの言葉を口にするには殆どなかったのではないかと推察します。それほど、今回の新型コロナウイルス禍は学生と教員に大きな日常の変化をもたらしました。

このような状況にあって、大学生活がもとに戻るのはいつだろう、「対面教育」を安定して提供することはそもそも可能だろうか、といった今後の大学教育への不安とともに、私たちは、外国語学部で学ぶことの価値や意義を改めて考えることを迫られている、と考えています。

留学を通じた外国語の修得には、それが短期であれ長期であれ、代えがたくまた得がたい喜びがあります。しかし、外国語を学ぶ楽しさ、面白さは、リスクを冒してまで追求すべきものなのでしょうか？このように人的交流が途絶えてしまった現在、留学の道を維持しつづけることにどれだけ意味があるのでしょうか？

また、我々は日々のニュースの中で諸外国の新型コロナウイルス感染情報などを頻繁に見聞きします。世界の情報は、日本にいながらこうしていつでも手に入りますし、AIの進化により、外国語の自動翻訳の質は驚くほど向上しています。わざわざ外国語を学ぶより簡単に、私たちは翻訳マシンを使って用を足せるこんにち、私たちが外国語を学ぶ理由は何なのでしょう？



外国語学部長  
千葉 庄寿

これらの疑問は、外国語学部の学びの本質である、外国語を学ぶ意味は一体何か、という問いにつながっていきます。我々外国語学部の教員は、今、新型コロナウイルスの影響で思いがけず海外との直接の交流が断たれてしまった今だからこそ、この新たな危機を迎え変貌していく世界情勢をしっかりと意識しながら学ぶことに、とてつもなく大きな意味があると感じています。学生には、強い意志をもつ我々教員とともに、食欲に外国語を学び、同時に世界に関するさまざまな知識や考え、情報と一緒に触れ、一緒に議論して学んでほしいと切に願います。

私たちは先の見えない不確実な世界、そして不確かな情報の中で生きています。海外のニュースの自動翻訳はもちろんのこと、メディアが伝える欧米や中国、世界の状況が、本当にそのニュースの日本語が伝えている通りなのかどうか、そのニュースの原文がもつ意味やニュアンスが的確に訳出されているのかどうかは、誰も保証してくれません。語学力は、自分でそれを確かめる術(すべ)であり、言うならば世界を読み取る武器、いや糧として、学生さん一人ひとりに磨いてもらいたいと思っています。

2020年度新入学生から、外国語学部のカリキュラムは一新されました。新カリキュラムは、各専攻の外国語の力をつける学びのしくみを核として、学ぶべき専門知識をより分かりやすく体系化し、一方で学部間の連携を意識した、データサイエンスのような全学的な枠組みが整備され、実効性あるカリキュラムに生まれ変わっています。

このような学部教育の新しい展開の中にあつて、私は改めて、外国語を学び、コミュニケーションのしくみや社会、文化を学ぶ「外国語学部の一員であること」に大きな使命を感じています。それは、言語が異なる人々の「生」の姿、「生」の情報を、自力で読み解くための知識と力をつける人材を育成すること、それにより、異なる言語を話す人と人との信頼関係を構築することに貢献すること、という使命です。これは、恐らく外国語学部に連綿と続いている伝統に根ざすものでしょう。私たちは、今まさに外国語学部はこの大きな使命の達成をめざして、語学力と人間理解力、リーダーシップを基調とした国際理解の促進に貢献し続けなければならないと思います。

今後、遠隔での学修がすすみ、学生が上級生になり、留学の時期がやって来るころには、新型コロナウイルスの問題にはある程度解決の目処がたっている、と期待したいところです(もちろん、予断は許しませんが)。その時が来て、学生さんが海外に出た時に、異なる言語を話す人たちとの交流がこんなにも素晴らしい力と勇気と豊かさを与えてくれる、ということに、私たちとともに学んでくれた学生の皆さんは気がつくはず、と信じます。それは、彼らにとって、これまでの先輩方が経験した留学以上の強い感動と学びの意欲を与えてくれる体験になるに違いありません。それまで、学生の学びを絶対に止めないこと。学生さんが自宅等今いる場所で、学ぶ意欲や努力を維持しつづけることは、本当に大変なことであると思います(海外から遠隔で授業に参加している学生さんもたくさんおります)。教員はもちろん、大学が丸となり、学生の支援に尽くし、ともに学んでゆきたいと思っています。

皆さまの温かく力強いご支援、激励を心よりお願い申し上げます。

# “多様性”をつなぎ新たな時代を拓く

現代社会では、人の活動範囲がこれまでのような文化的共同体内にとどまってはいられなくなっています。我々は、日々、“異なる価値”と遭遇し、その対応を迫られています。

こうした状況下において、現実的対処法として効果を発揮するのが、いわゆる「グローバルスタンダード」の考え方です。「グローバル・スタンダード」は、その実用性・効率性です。多様性を、統一的基準で一様に処理してしまうきわめて効率的・実用的なロジックです。しかしその一方で、この手法は、多様性をわざわざ単一基準でとらえるものであるため、多様性の持つ豊かさを失わせてしまう危険性を常にはらんでいます。便利さ・効率性と引き換えに、ある種の妥協・矛盾を引き起こす危険性を持っている。「グローバル・スタンダード」はこうした功罪両面を併せ持った論理だと言えます。

こうした「グローバルスタンダード」のデメリットには、すでに多くの人々が経験的・直観的に気づいています。しかし、この欠点を補う術を、我々はまだ見出せていないのが現状です。この現状に果敢に挑もうとしているのが、麗澤大学の新学部、国際学部です。

国際学部が提案するのは、多様性を多様性としてとらえ、異質のものを繋いで一つの複合的論理に組み上げていくような発想です。「複眼性の論理」を志向し、異質のものをつなぐことで、グローバルスタンダードが生む軋轢に対処していく…これが、この学部の考え方です。「グローバル・スタンダード」の功罪両面を十分に理解した上で、そこに複眼性の「つなぐ発想」を取り込んで、新たな知のあり方、新しい学びのスタイルを創造し、社会に提案していきます。

国際学部の「多様性」は、カリキュラムにおいては、人文科学から社会科学までの幅広い学びの領域（Japan Studies、多文化共生学、国際協力・国際関係論、経済・ビジネス…の各分野と、その基盤に国際共通語「英語」を学びの手段として身に付けていくカリキュラム）として現れています。また、学びの場も、教室だけにとどまらず、教室の学びを社会へつなぐことを意識し、学生の能動的学習（いわゆるPBL型の学習スタイル）を積極的に取り入れたものとなっています。更に、学部を構成する学生も、外国人留学生を含む多様なメンバーが集まっており、日常的多文化共生空間が教室の内外に展開するように工夫が施されています。こうした環境の中で、「つなぐ学び」のスタイルを身に付け、「複眼性の論理」の発想で新たな時代を切り拓いていけるような、タフで行動力のある“真のグローバル人材”の育成を目指します。

無鉄砲だが、志は妙に高い「麗澤大学の“三男坊”」。麗澤大学国際学部の成長を温かく見守っていただき、時に厳しい叱咤激励と力強いご支援を賜らんことを、心よりお願い申し上げます。



国際学部長  
野林 靖彦